

## 特別活動における現状の検討と展望 —教員養成課程の学生の記述を通して—

胡 田 裕 教\*

### **The Current Status and Prospects of Special Activities : Through the Descriptions by Students in a Teacher Training Course**

Hiroyuki Ebita\*

#### **Abstract**

The purpose of this research is to explore the priorities of third-year university students who belong to the teacher training course and have completed educational training in special activities.

As a result of the research, it was suggested that when dealing with the contents of class activities and homeroom activities in special activities, the importance and priority differ depending on the type of school.

In other words, especially for students who have written a learning guidance plan for elementary school, the item of "career formation and self-actualization of each individual" may not be a high priority in special activities. Regarding career formation, students may think that it is still early in elementary school due to timing issues.

On the other hand, for students who have written a high school learning guidance plan, it is time for them to think about a future course that is realistic and how to live their own lives, so there is more awareness of the need for special activities.

#### **キーワード**

特別活動 キャリア形成 生き方 教員養成課程 学習指導案

#### **I. 問題の所在と目的**

平成 29・30 年度に告示された初等中等教育における新しい学習指導要領が学校現場にお

---

\* えびた ひろゆき：大阪国際大学国際教養学部非常勤講師（2020. 12. 4 受理）

いて現在始動している。厳密には、小学校では令和2年度から全面实施されており、中学校、高等学校においてもそれに続く形で翌年、翌々年から実施することになっている（中学校は全面实施、高等学校は学年進行で実施）。その中の中学校における特別活動の目標を例に挙げると、文部科学省（2017b）の学習指導要領第5章の第1に、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いの良さや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のおり資質・能力を育成することを目指す。（1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。（2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。（3）自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」と示されている。最後の（3）のところで、「集団や社会」の箇所には、高等学校（文部科学省，2018）では、「主体的に」、「参画し」という言葉が入ったり、「人間としての生き方」の箇所に、小学校（文部科学省，2017a）では「自己の生き方」、高等学校（文部科学省，2018）では「人間としての在り方生き方」となっていたりすること以外、小学校、中学校、高等学校でほぼ同じ内容のことが示されている。つまり、社会との関りの中で、自分がどのように生きていくことができるのかということについて子どもたち自身が問いを立て、多様な他者と関わりながら、それに答えていくことが目指されていると考えることができる。これらは、今回の学習指導要領の改訂が、カリキュラムマネジメントの方向性として、教育と社会との関連を強化し、「社会に開かれた教育課程」を目指していることに起因する。

変化が激しく未知の課題に対応することが求められる知識基盤社会といわれる現代において、次代を拓く人材や市民を育成する観点からも、社会との関連を通して自己の生き方を考えていこうとする特別活動の取り組みは重要であると考えられる。

そこで、本稿では、教員養成課程に所属し、教育実習を終えた大学3年生が、こうした特別活動で取り扱う内容について、何を大切だと考え、実践していこうとするのかを探索的に考察することを目的にする。教員養成課程で教育実習段階まで終えた学生が、特別活動で取り扱う内容についてどのように考え、近い将来、教育実践を行っていこうとするのかを考察することは、これからの世代の教育のあり方を考える意味でも意義あることだと考えられる。

教職科目の授業の中で実施した学生へのアンケートや記述文から特別活動を捉えた先行研究は数々ある。近年では、例えば、体験的活動のリスクを取り扱い、それらのリスクを伝えることに焦点化したリスクコミュニケーション演習から質問紙による分析を行った研究（村越・河合，2020）、中学校や高等学校時代に、生徒の立場で体験したことを振り返り、その記述文から分析した研究（並木，2018）、また、学級における生徒間の「問題」に教師として遭遇する場面を描写した著者作成のシナリオを用い、その中で展開される場面設定に対する質問への学生たちの回答文から分析した研究（大日方，2018）などがある。

一方、本稿は、特別活動を大きな柱とした「教科外活動の研究」という教職科目の授業において、学生たちが予め学校や児童生徒の状態を設定した上で、記述した特別活動の学習指導案について分析するところにその特徴を有する。

## Ⅱ. 研究方法

### Ⅱ-1. 研究対象等

20XX年度<sup>1)</sup>、大学の教員養成課程に所属する、主に初等教育英語選修、中等教育英語専攻、初等教育日本語教育選修の3年生を中心にしたクラス（一部大学院生や4年生も履修）で合計59名（研究協力者）を対象にした。その学生たちに対して、筆者は教職科目「教科外活動の研究」として半期（後期）の授業を行った。「教科外活動の研究」は教職課程における「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の中に属する。授業では、「総合的な学習の時間の指導法」と「特別活動の指導法」について中心に取り扱うことにした。本稿では、そのうち、「特別活動の指導法」についての領域を対象にした。

### Ⅱ-2. 調査時期と方法

調査時期は、20XX年度後期の第11回から第15回までの授業において、それまでの授業を踏まえ、学習指導案の作成、個人内検討、プレゼンテーション、グループ内検討を行った。そこに焦点を絞ることにした。「教科外活動の研究」は「総合的な学習の時間」と「特別活動」を射程に入れることより、学習指導案を記述するにあたって、「総合的な学習の時間」を選択した学生もいれば、「特別活動」を選択した学生もいた。本稿では、その内、「特別活動」を選択した8名を対象にした。したがって、特別活動を扱った第1回から第6回までの授業を踏まえた上で、第11回から第15回までの授業を対象にした。

特別活動における学級活動やホームルームの学習指導案作成における項目内容については、①学校の特徴の設定、②校種、③学年、④授業教科名、⑤題材名、⑥本時の目標、⑦本時の評価規準、⑧本時の指導（導入・展開・まとめ）とした。①の「学校の特徴の設定」については、授業を行おうとする学校、児童生徒の状況や特徴を具体的に想定した上で、学習指導案作成に取り掛かるようにした。これは、学習指導案がより実効性のあるものにするために行った。本稿では、特別活動の学習指導案に記述された内容について、学生が考える課題や興味・関心に焦点化し探索的に考察を行う。

### Ⅱ-3. 授業について（その全体像と背景）

「教科外活動の研究」の授業内容を示したものが表1である。授業目標としては、「特別活動や総合的な学習の時間を中心とした教科外活動の意義と理論、目標と課題、具体的な指導内容を理解するとともに、それらの指導の在り方について考えを深める。また、児童・生徒の主体性を尊重した活動を支援していくことができる資質や能力、指導法の習得を目標とする」とした。授業計画・方法としては、「授業は基本的に講義形式を取るが、内容に応じて個人ワークやグループワーク、グループディスカッションなどの他者とかかわる機

会をできるだけ多く持つようにする。また、講義の中でプレゼンテーションやワークシート、レポートの記入、小テストなどを実施する」とした。

表1 「教科外活動の研究」の授業内容

回	授業内容
第1回	オリエンテーション（授業計画とその進め方、評価方法等をシラバスを確認しながら行う。児童生徒時代を振り返る）
第2回	教科外活動の位置づけと教育的意義（1）：特別活動の歴史と位置づけ
第3回	教科外活動の位置づけと教育的意義（2）：教育課程における特別活動の教育的意義
第4回	学級活動・ホームルーム活動の理論と指導法
第5回	学校行事・生徒会活動の理論と指導法
第6回	特別活動における指導・評価の基礎理論 【小テスト①】
第7回	総合的な学習の時間の位置づけと教育的意義
第8回	総合的な学習の時間の全体計画・単元計画（1）：年間指導計画
第9回	総合的な学習の時間の全体計画・単元計画（2）：実践事例
第10回	総合的な学習の時間の指導法と評価 【小テスト②】
第11回	学級活動の具体的指導法①：学習指導案の作成
第12回	学級活動の具体的指導法②：学習指導案の検討
第13回	学級活動の具体的指導法③：グループ内での学習指導案のプレゼンテーションと検討、振り返り1
第14回	学級活動の具体的指導法④：グループ内での学習指導案のプレゼンテーションと検討、振り返り2
第15回	授業のまとめ（教科外活動の意義と課題、理論と指導法についてグループディスカッションを行うことによって振り返り、自分の考えをまとめ総括する。）

（二重枠内が「特別活動」に関わる授業を示す）

また、授業の形式としては、授業終了後に A4 版用紙 1 枚に集約したフォーマットに「授業の中で一番大切だと思ったこと」と「疑問事項」をそれぞれ 3 行程度で毎回記述することとし、前回までの授業で自分が記述した内容をすぐに確認できる状態にした。この取り組みは、「一枚ポートフォリオ評価」（2013、堀）を参考にしながら、筆者が改良を加えて作成したものである。「一枚ポートフォリオ評価」の考え方として、堀（2013）では、学習履歴として記述することで、「『既知』と『未知』との葛藤や調節という相互作用を経ながら『既知』なるものが組み替えられていく」とし、それは、「構成主義の考えに基づく学習・授業観を背景にしている」としている。また、「学習の成果を適切にみとるパフォーマンス評価の導入」であると提案者の立場から述べている。前述した「疑問事項」については、教員に対して質問を行うというよりもむしろ、「この内容の詳細はどうなっているのだろうか、調べてみよう」というように自分に対して問いを立てるという項目である。学生がこれらを毎回行うことによって、自己を俯瞰する形式で学習を進めることが可能になる。そして、その積み重ねが学習指導案に反映されるしくみにした。作成した学習指導案は基本 4 名のグループで一人 20 分間のプレゼンテーションを行い、その後すぐに、グループ内のメンバーからの質問や意見、それらを受けて発表者の感想など、20 分間の振り返りの時

間を設けた。

### Ⅲ. 研究結果

教職科目「教科外活動の研究」を受講した学生の属性を表2に示す。ほとんどが3年生で、初等教育を専攻する学生の方が多し授業クラスである。

表2 教職科目「教科外活動の研究」を受講した学生の属性

	専門領域	初等教育	中等教育	その他	合計
3年生	英語	18名	15名		53名
	日本語	20名			
4年生	美術	1名			3名
	英語		1名		
	日本語			1名	
大学院生	小学校免許取得コース	3名			3名
合計		42名	16名	1名	59名

また、特別活動を選択した8名について、学習指導案のすべての項目の中から、それぞれ、①学校の特徴の設定、②校種、③学年、⑤題材名、⑥本時の目標、⑦本時の評価規準(④の授業教科名はすべて「特別活動」)について示したものが表3である。

特別活動を選択した8名のうち、小学校を選択した学生が7名(内、低学年2名、中学年3名、高学年2名)、中学校が0名、高等学校が1名である。また、評価規準としては、「思考力・判断力・表現力を含むもの」が10名、「知識・理解に関するもの」が6名、「意欲・関心・態度を含むもの」が3名、「学びに向かう力を含むもの」が3名、「他者受容」が1名、「自己についての考え方」が1名(延べ数)である。

学習指導要領では、特別活動において育成する資質・能力における重要な要素として、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の3つを提示している。また、特別活動に含まれる活動として、学級活動(高等学校はホームルーム活動)、生徒会活動(小学校は児童会活動)、学校行事(儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事、勤労生産・奉仕的行事)、クラブ活動(小学校のみ)としている。本稿では、授業として行う学習指導案を作成しているため、学級活動・ホームルーム活動における記述ということになる。学級活動・ホームルーム活動の内容について、学習指導要領では、①学級(ホームルーム)や学校における生活づくりへの参画、②日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全、③一人一人のキャリア形成と自己実現の3点をすべての校種に共通して挙げている。これらを指標にして8名の個別の学習指導案の内容について探索的に分

表3 特別活動を選択した8名の学習指導案(抜粋)

	学校の特徴の設定	校種	学年	題材名	本時の目標	本時の学習指導要領
Aさん	自分自身のことについて考えたり、自分のために活動したりする力は身につけているが、他者との理解の中で行動したり、協力して集団で取り組んだりする力が十分でないという特徴がある。	小学校	1年	はじめてのうんどうかいをみんなできこうさせよう	①運動会をみんなで成功させるために必要なことについて理解し、集団で協力しようすることができるようにすること。 ②運動会をみんなで成功させるために、自身の課題を見出したり、目標を設定したりし、意思決定をすることができるようにすること。 ③助け合ったり協力し合ったりして、集団における人間関係をよりよく築こうとすることができるようにすること。	①知識・技能 ②思考・判断・表現 ③主体的に学習に取り組む態度
Bさん	学校の敷地内には、「○○ヶ池」 <sup>2</sup> という小さい池がある。そこには、ザリガニやカメといった生き物や、遊んで住みついてきたカモが暮らしている。休み時間、児童たちはよくカモを覗き込んで観察するが、観察が目的に過ぎない。池があるため池のそばに遊び場を設け、「自然学習」の力を生かして、自然をテーマにした活動を通して集団行動、協働性を育てようとしている。	小学校	2年	「○○ヶ池」で遊ぼう!	「○○ヶ池」でのイカサ釣り、ザリガニ釣り、カメ小屋おそうじを通して、他者との協力をしながら、それぞれの役割がある役割を体験することで、自然と生物についての知識や価値観、集団行動が培い合いによる合意形成、意思決定をすることができる真実・能力を育てる。	①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③学びに向かう力・人間性等
Cさん	①5年生になるとクラブ活動や委員会活動が本格化が始まる。 ②4年生の2月終りから実施。 ③自分に合ったことや自分らしさを考え、関わった人たちに事前関係なく自分の言葉で「良いところ」を伝えてほしい。 ④キーワードは「認める」、「勇気づける」	小学校	4年	良いところを伝えられる人になろう	①自分の言葉で他者の良いところを一言で表現する。 ②他者からの「一言」や「良い言葉」を認める。 ③自己や他者の良さを分析する。	①表現力 ②他者を認める態度 ③自己についての考え方
Dさん	①異学年間口こはしい上下階層がないものの、とくに異学年の交流がない。あるのは、遊学時のみで、それ以外はまだ交流がない。 ②外で遊ぶ児童が多い。	小学校	5年	異学年集団による交流	普段、あまり関わりがない異学年間での交流を図り、異学年間の仲を深め、より活気ある学校にすること。	①生きて働く知識と技能 ②思考力・表現力・判断力 ③学びに向かう力・人間性
Eさん	給食で出る牛乳を飲むことと並行して、近頃、飲み残しや飲まない児童が増えている。	小学校	5年	私たちと牛乳	①学校給食の牛乳の役割・効果を理解する。 ②自分に必要な栄養を知り、食べ物バランスよく食べようとする。	①牛乳の役割・効果を理解できる。 ②自分の意見を持ち、発表することができる。 ③食べ物大切に食べようとする。
Fさん	本校では児童の主体性を大切にしている。特に、「ありんこ」の時期では、4~6年生が主体となり自主活動をしている。実験の児童たちは心強く男女ともに仲が良い。しかし、種痘を打つ機会もあまり、自信を持って自ら進んで動けるようにするのが今後の課題である。	小学校	6年	クラスに必要な仕事(案)をつくらう	今学期の学級生活をより居心地よく充実したものにするために、本時では、自分たちで必要な床を今までの経験から考え、決める。	①意欲・関心 ②思考・判断 ③表現
Gさん	①修学旅行では、毎年、京都・奈良へ行き、社会で学んだ歴史や建造物や文化の建造物を見学する。 ②学習の発展は社会的に楽しく、ICT教育にも積極的に取り組む。そのため、PCルームを使う活動が多い。	小学校	6年	修学旅行のしおりを作ろう!!~自由研究編~	①社会科で学習した事項(奈良や京都の歴史)を実際に見たり訪れたりする場面を立てる。 ②興味のある場所を調べ、訪れ方や費用から、そのものの背景をまとめたしおりを作る。 ③PCを利用して情報を集め、協力して計画を立てる。	①人間関係形成(表現力・思考力) ②社会参画(関心・意欲・態度) ③自己表現(知識・技能)
Hさん	備前直江5種彦の高等学校で、卒業後は、働く人もいれば、専門学校へ行く人、大学に行く人もいるが、その意味があまり届いていない。高校生活で慣れてきた2年生であるが、文理選択をしなくてはならない。将来、自分がどのような道に進むのか考えている。	高等学校	2年	将来について考えてみよう	①自分の考えだけでなく、他者の考えも聞きながら自分の将来を計画することができる。 ②興味はなくても、大雑把でも自分のやりたことを見つけ、将来の自分と今の自分を逆算する。	①意欲・関心 ②表現 ③知識・理解

析することにする。

Aさん：〔小学校〕運動会という学校行事（健康安全・体育的行事）について取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。協力して集団に取り組む力が不足しているという学校の特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【集団で協力】、【課題、目標の設定】、【意思決定】、【よりよい人間関係の築き】、

【主体的】が重要な語句になっている。

- Bさん：〔小学校〕自然学習について取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。自然をテーマにした活動を通して集団行動、協調性を育もうとしているという学校の特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【他者との協力】、【課題解決】、【自然についての知識や価値観】、【集団行動】、【合意形成】が重要な語句になっている。
- Cさん：〔小学校〕クラブ活動や委員会活動の準備としての位置づけとして取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。関わった人たちに年齢関係なく自分の言葉で「良いところ」を伝えてほしいという願いから生じた学校の特徴の設定と本時の目標から考えると、【勇気づけ】、【他者の良い部分に対する自己表現】、【他者からの良い言葉に対する自己容認】が重要な語句になっている。
- Dさん：〔小学校〕異学年集団の交流について取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。異学年の交流がないという学校の特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【異学年間の交流】、【学年間の仲の深まり】、【活気ある学校】が重要な語句になっている。
- Eさん：〔小学校〕学校給食の牛乳について取り上げている。学級活動の内容は②を中心にして①も行っている。近年、牛乳の飲み残しや飲まない児童が増えているという学校の特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【牛乳の役割と効果】、【自分に必要な栄養】、【バランスのよい食事】が重要な語句になっている。
- Fさん：〔小学校〕クラスに必要な係について取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。積極性に欠ける面があり、自信を持って自ら進んで動けるようにしたいという児童たちの特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【学級生活の居心地と充実感】、【自分たちに必要な係】、【主体性】が重要な語句になっている。
- Gさん：〔小学校〕修学旅行という学校行事（旅行・集団宿泊的行事）について、しおりを作る場面を取り上げている。学級活動の内容は①と②を中心に行っている。ICT教育に積極的である学校の特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【計画立案】、【調べ学習】、【PC活用による情報収集】、【しおり作成】が重要な語句になっている。
- Hさん：〔高等学校〕文理選択をする時期に自分の将来について考える場面を取り上げている。ホームルーム活動の内容は②と③を中心に行っている。将来の進むべき道について考えている生徒たちの特徴の設定を土台とした本時の目標から考えると、【相互評価】、【キャリアプランニング能力】、【自己発見】、【将来設計】が重要な語句になっている。

#### Ⅳ. 考察

教職科目「教科外活動の研究」では「総合的な学習の時間」と「特別活動」のそれぞれの領域を取り扱ったが、学習指導案を作成するにあたって、特別活動を選択した学生は8名

で、その内訳は小学校を選択した学生が7名、中学校が0名、高等学校が1名であった。<sup>3)</sup>これは、59名中42名(71.2%)が初等教育を専攻する学生であったことより小学校に偏りが生じたものと考えられる。また、元をたどれば、59名中8名が特別活動を選択したということは、51名が総合的な学習の時間を選択し学習指導案を記述したということである。

特別活動を選択した学生が少ない理由について、総合的な学習の時間との比較の中で考えると、特別活動は、学校生活の充実を目指した活動であることより、学内での活動を限定的に捉えた学生がいた可能性がある。総合的な学習については、探求を目指した学内の域を超えた事象を対象とした取り組みに興味・関心を示した学生がいた可能性があり、それに関して自由度が高いというイメージが内在化され、総合的な学習の時間を選択した学生が多くなったということが1つの理由として考えられる。

一方、特別活動を選択した学生について、その特徴を考察すると、特別活動の中の学級活動・ホームルーム活動の内容について、学習指導要領では、前述の通り、①学級(ホームルーム)や学校における生活づくりへの参画、②日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全、③一人一人のキャリア形成と自己実現の3点を挙げているが、研究結果では、8名中7名が①と②についての記述内容になっており、1名だけが③についての記述を行っていた。しかも、その7名は全員が小学校の学習指導案を記述した学生で、1名については高等学校の学習指導案を記述した学生であった。このことから、特別活動の中の学級活動・ホームルーム活動の内容を取り扱う場合、校種によって重要度や優先順位が異なるということが考えられる。つまり、特に小学校の学習指導案を記述した学生にとっては、特別活動においては、③「一人一人のキャリア形成と自己実現」の項目は優先順位が高いものではない可能性がある。キャリア形成に関しては、時期的な問題で小学校段階ではまだ早いと学生は考えているのではないか。それに対して、高等学校の学習指導案を記述した学生にとっては、現実味を帯びた自己の進路について、また自己の人生の在り方生き方を考える時期であることより、特別活動において優先的に取り扱う意識が生じた可能性がある。

また、これら2つのこと、つまり、特別活動を選択した学生が少ないことと、特別活動の中の学級活動・ホームルーム活動の内容に関して、キャリア形成等は優先順位が高くないこととは、無関係ではない可能性がある。キャリア形成について考えようとした学生については、総合的な学習の時間の学習指導案を作成したことも考えられなくはない。実際、総合的な学習の時間を選択した51名のうち、キャリア形成に関連した学習指導案を作成した学生は11名(内訳、小学校6名、中学校4名、高等学校1名)であった。リクルート進学総研(2019)によると、全国の高等学校に対してキャリア教育の取り組みに関連して、教育活動のどの時間を活用してキャリア教育を実施しているのかをたずねたアンケートの結果では、総合的な学習の時間が77.5%と一番高く、続いて、特別活動が56.7%である(複数回答可)。これは、高等学校のデータではあるが、全校種においても、キャリア教育、キャリア形成に関連した教育活動については、総合的な学習の時間を活用することが優先順位として高い傾向にあるのかもしれない。



## V. まとめと展望

本稿の目的は、教員養成課程に所属し、教育実習を終えた大学3年生が、特別活動で取り扱う内容について、何を大切だと考え、実践していこうとするのかを探索的に考察することであった。分析の結果、特別活動の中の学級活動・ホームルーム活動の内容を取り扱う場合、校種によって重要度や優先順位が異なるということが示唆された。つまり、特に小学校の学習指導案を記述した学生にとっては、特別活動においては、「一人一人のキャリア形成と自己実現」の項目は優先順位が高いものではない可能性がある。キャリア形成に関しては、時期的な問題で小学校段階ではまだ早いと学生は考えている可能性がある。それに対して、高等学校の学習指導案を記述した学生にとっては、現実味を帯びた将来の進路について、また自己の人生の在り方生き方について考える時期であることより、特別活動において優先的に取り扱う意識が生じた可能性があることが示唆された。ただ、これらは8名という少数の記述データからの分析であるゆえ、一般化するまでには至らないと考える。しかし、探索的に分析した結果、少なくとも個別の事象として存在していることは事実である。

本稿では、学生の記述した内容を通して、特別活動におけるキャリア形成に関連した取り組みについての指摘を行った。社会との関連を通して自己の生き方を考えていくことは重要なことである。文部科学省（2016）では、キャリア形成に資する学習の定着を図るため、新しい学習指導要領に向けて、「小・中・高等学校を見通した充実を図るため、キャリア教育の中核となる特別活動の役割を一層明確にするとともに、『キャリア・パスポート（仮称）』の活用を図る」、「キャリア教育に関わる活動に関して記述し振り返る『キャリア・パスポート（仮称）』を作成し活用を図る」、「『キャリア・パスポート（仮称）』などを活用して、生徒が自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりすることができるようにする」という提言を行った。「キャリア・パスポート」とは、「児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。なお、その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない」と定義されている。その後、文部科学省（2019）で、「キャリア・パスポート」の例示資料が公開され、具体的な記入シートが形作られてきた。さらに、「『キャリア・パスポート』の様式例と指導上の留意事項」の中で、実施時期として、2020年4月よりすべての小学校、中学校、高等学校において実施することが示された。このように、特別活動とキャリア形成、キャリア教育との関係がより強化されていることがうかがえる。さらに、特別活動はキャリア教育の要として位置けられるようになったことから考えると、特別活動と、総合的な学習の時間や各教科の時間との連携が必要になる。とりわけ、今までのキャリア教育の実施状況から考えると、総合的な学習の時間との関係

がより重要視されるのではないか。今後の展開を期待したい。

注

- 1) 研究協力者の特定を防ぐために年度を伏せた。
- 2) 場所の特定を防ぐために名前を伏せた。
- 3) 特別活動の学習指導案を記述した8名が専攻するコースの内訳は、初等教育が7名、中等教育が1名であった。ただし、そのほとんどの学生は、自分が専攻する領域の学習指導案を記述したが、初等教育の7名のうち1名が高等学校の学習指導案を記述し、中等教育の1名が小学校の学習指導案を記述していた。

参考・引用文献

- 堀 哲夫 (2013) 『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』 東洋館出版社。
- 文部科学省 (2016) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- 文部科学省 (2017a) 「小学校学習指導要領 (平成二十九年告示)」。
- 文部科学省 (2017b) 「中学校学習指導要領 (平成二十九年告示)」。
- 文部科学省 (2018) 「高等学校学習指導要領 (平成三十年告示)」。
- 文部科学省 (2019) 「『キャリア・パスポート』例示資料等について」。
- 村越 真・河合美保 (2020) 「教職課程におけるリスクコミュニケーション演習の効果とリスクへの態度の変容」『教科開発学論集』(8), pp. 1-6.
- 並木 正 (2018) 「特別活動指導法の授業における学生の特別活動経験の違いについて:授業でのアンケートを実施して」『洗足学園音楽大学教職課程年報』(1), pp. 97-109.
- 大日方真史 (2018) 「学級内の生徒間関係の問題に関するシナリオを用いた教職科目の授業」『三重大学教育学部研究紀要』(69), pp. 483-490.
- リクルート進学総研 (2019) 「高校教育改革に関する調査 2018」報告書  
([http://souken.shingakunet.com/research/kaikaku2018\\_houkoku.pdf](http://souken.shingakunet.com/research/kaikaku2018_houkoku.pdf)) 2020年11月確認。